



幼 児 期

— 排泄とアイデンティティを考える —

津 守 真

幼児期は、人間の一生涯で独自の時期である。

幼児は、一日満ち足りて生活すれば幸せになる。

現代は幼児にとって生きにくい時代で、多くの幼児が悩みを抱いている。大人が想像力をもって自分の身におきかえて考えれば、幼児の悩みは人間の心に深く共通であることが分かる。

幼児が存在の危機に立つとき、大人に受け入れ難い行動によって悩みを表現する。



大人がそれを理解しないと、子どもは次第にもっと極端な行動をして大人を困らせる。そのまま次の時期に持ち越すと、その後の成長も歪められる。

私は最近十数年、養護学校で幼児及び学齢の子どもとかかわり、更に大人になった障碍をもつ人たちと福祉施設でかかわってきたが、長い年月にわたって人間の生涯をみたとき、幼児期がいかに独自な意味をもつかをいまあらためて痛感している。

今回は、悩みをかかえたひとりの幼児の保育について述べよう。

排泄物と絵の具を混ぜる

新たに入園した四歳のHくんが、絵の具を床にあげ、そこにおしっこをし、手を入れてこねたときには私共はびっくりした。絵の具を十瓶使ってしまった。この子はおしっこをトイレですることは分かっている。それなのに保育室の真ん中で絵の具とおしっこを混ぜ合わせてこねるのは、よほど気持ちが混乱しているのだろうと私は思った。彼は急に庭に走り、「救急車、怪我した」と言った。この子自身、何か非常な危機感を感じていたのだろう。この前日に、Hくんは美術の先生の顔と口に絵の具を塗り、周囲の人たちを驚かせたという。その先生は、心ゆくまでその絵の具に付き合ったことを私は聞いていた。最初は意味は分からなくても、子どもの真剣さに何か重要なことがかくされていることを察して、十分にそれに向き合ってくれる保育者たちが



いる。その人たちに支えられて私もまた子どもに向かう。

身体存在の混沌

私は親が相談に来たときにも、最初に子どもの前で既往歴や問題を聞くことをしない。まず、他の子と一緒に保育室で子どもが安心して遊ぶようにする。それが子どもが幼稚園や学校を信頼する最初の体験となる。その遊び方を見るとその子の大体の様子が分かる。親の話聞くのはその後である。そのようにして知ったところによると、Hくんは家族の事情のために、生まれ育った家と父親から離れ、電車に乗って東京の祖母の家に引越した。幼児にとっては、家を引越すことは子どもの生活を根底から変えることである。この子は私共のところに来たときは、雲の上を歩くような不安定さの中にいたに違いない。その上、東京の家はガラス張りのマンションで、Hくんにとってはいつも他人から見られており、身体の落ち着き場がないのではないかと察せられた。この子は自分の居場所はどこなのかという疑いの中にあつた。身体存在に密着した人間の基本的なアイデンティティが混乱していたと言ってもよい。それから何日もHくんは絵の具をしたたらせて運び、床を絵の具だらけにする日がつづいた。



遠出をする

数週間の後、Hくんは、赤い屋根のついた三輪車で道路に行くといつてきかなかつた。男の職員が一緒に外出した。遠くまで出かけて三時間くらい帰って来なかった。この三輪車は子どもが自分の足で歩いて動かすもので、子どもたちには魅力があつたが、大人は腰をかがめて押さなければならず、大変だつた。一緒に出かけた職員はへとへとなつて帰つてきた。この外出は何日もつづいた。Hくんが乗り物で遠出するときこの子は何を考へているのだろうと私共は話し合つた。電車に乗つて東京に引越して来たこの子は、こうして車に乗つて自分の過去を探しに行つたのではないだらうか。

過去への問い

この頃、Hくんは私をつかまえて真剣な目で話しかけた。H「校長先生たばこすう?」私「吸わない」H「前に吸つた?」私「吸つた」H「校長先生自動車運転する?」私「しない」H「前は?」——過去の生活と今の生活とがどのようにつながつてゐるのかという疑問をこの子は抱いてゐることがすぐに分かつた。

次の日、Hくんが赤い屋根の付いた三輪車にホースで水をかけて洗つてゐるのが見えた。私がそばにゆくと、「校長先生たばこ吸う? ビールは? ウイスキーは?」



と、私に真剣に尋ねた後、三輪車に箱車をつなげてくれと私に要求した。紐やゴムテープで苦心してつなげたが、なかなかうまくいかない。できそうもないことをやってくれと無理難題を言って私を困らせた。なんとかして私とのつながりをつけ、そして過去と現在との問いをつなげようとしているように思えた。

ある日、Hくんは私にわざとお湯をかけた。これまでの私の体験からは、水を人にかけるのはその人に感心があるからと考えてよい。「ぞうきんもってきて」と私に頼んだ。私が雑巾をもつてくると、Hくんは「お味噌がついている」と言う。私が「何にもついていないじゃないか」と言うのと、笑顔をみせた（お味噌は大便と関係がある）。

名札への疑問——排泄とアイデンティティ

雨が降った一日、Hくんは、午前中長靴をはいて、かっぱを着たまま校長室のソファの上から外を見ていた。着たままというのは、いつでも出かけられるようにということでもあり、更に登園したときの自分を変えたくないという意思表示でもあるだろう。

弁当の机で、ポットからお茶を床にこぼした。私のコップをとり、私のお茶も床にこぼした。



Hくんはその頃名札に非常に関心をもっていた。自分のロッカーの名札と隣の子の名札を何度も自分で読んだり、私に読ませたりした。一緒に来ていた職員の子どもTくんに（その子は普段は別の幼稚園にいつているので、その子の名札はロッカーに貼ってない）「Tくん 名札ある？」と尋ねた。その子の母親が「ここにはTくんの名札はない、この子の幼稚園にある」と言うと、Hくんは「あっち？」と指さす。名前がロッカーに付いていない子はどこに所属するのか、自分はどこに所属するのかという疑問である。これほどにこの子の意識が明瞭になってきたと言えるだろう。

私はこの子の名前に対する関心を引き継いで、F先生に子どもたちの名札を作ってもらった。F先生は青色の絵の具で名前を書いてくれた。Hくんは緑がいいと言い、青色の名札を破いて捨てた。F先生が緑の絵の具で大きな紙に名前を書いた。Hくんはその緑の絵の具と筆をとり、紙全部をぬりつぶし、「名前が見えない」と言う。あたり一面緑の絵の具になり、どこに何が書いてあるのかも分からなかった。手にも足にも絵の具がつき、私におぶさって洗いにいった。そしてたらいの緑色の水のなかにおしっこをした。さっきお茶をこぼしたところにもおしっこをした。もはや混乱ではなく、確認のように見えた。

Hくんは次の日は職員室で絵をかき、ブランコでゆっくりと過ごした。それから部屋を引き出しを全部、二階に運ばせた。うんちをするといいながら遂にしなかった。



それ以来おしつこと絵の具を混ぜてこねる遊びは全くしなくなった。

この間約十カ月、保育者にとっては子どもとの格闘の日々であったが、この日以来子どもは悟りを開いたかのように変化した。幼児期は変化もスピーディーである。

幼児期に子どもが心に抱いている疑問は、幼児の間に保育の中で答えを見い出しておかねばならない。それが子どもにとって未解決のまま放置されると、表現はエスカレートする。幼児の疑問は人間の根本にふれている。しかも幼児はほんのちよつと大人が分かってくれたと思うと、笑顔をみせる。実にかわいらしい。そして変化も早い。

幼児期は実に貴重な時期である。

排泄とアイデンティティについて考える

・この子は排泄物と絵の具とを混ぜ合わせてこねた。排泄物は本来自分に属する。絵の具は感触や形状が排泄物に似た物質であるが、外界に属する。それを混合させたのは、自分に属するものと属さないものとの境界が混同し、あるいは不明瞭なのであろう。この子どもは存在の危機にあった。自分の存在の根底である家がどこなのか分からなくなっていた。この保育の過程でこの子は自分の名前に気づき、その所屬に気付いた。名札に関心をもち、絵の具で名前を書いたり塗ったりする遊



びによって自分の所属を確認した。最初、排泄物と絵の具とを混ぜ合わせたのは、アイデンティティの問いが子どもの中の心の中にあつたと言ってもよいのではないか。この点についてはいずれ時をあらためてもう一度考察したい。

・この子が次第により明瞭に自分を語るようになったのには、心の中を語っても大人はそれを分かろうとしてくれろという信頼感ができていたからである。最初の日に美術の先生の顔に絵の具を塗ったとき、その先生は大胆にその行為を受け止めてくれた。そのことがこの子に安心感を与えた。顔はその人がだれであるかを判別する第一のきっかけであり、アイデンティティと関連している。

・おしっこ・うんち・トイレなど排泄に関する行為は、躰の対象として見るだけでなく、子どもにとって内的な意味をもっている。